台大日本語文研究第 24 期
2012 年 12 月，頁 129-148
2012-10-20 收稿，2012-12-12 通過刊登

現代日語和製外來語的構詞
—透過歷時性的考察—

林慧君*

摘要

隨著時代的變遷語言也會跟著一點一點地改變，本篇論文即探討在現代日語語彙中，變化最爲顯著的和製（日本製）外來語其變遷相關之問題。本稿使用固定每年發行且可縱斷性捕捉語詞變化的《現代用語の基礎知識》爲調查資料，針對和製外來語的構詞從歷時性的角度來探討。

首先，從數量變化來看外來語的語詞構造，觀察到：這近 10 年和製外來語的詞形有逐漸偏好變短的傾向。

其次，從造詞法來看，基本上依循日語固有的造詞法所形成的外來語居多，在任何一個年代仍以合成法最爲優勢。

此外，近 30 年和製外來語的造詞法當中，特別是從 80 年代後半期出現了外來語其原外語詞素介入日語構詞的特徵。換言之，日語和製外來語的構詞已有超出日語詞素範圍的現象，可觀察到藉由原外語詞素的構詞操作所形成的和製外來語。

關鍵詞：外來語、和製詞（日本製語詞）、構詞、詞素、歷時性

* 台灣大學日本語文學系副教授

The Word Formation of Japanese-made Loan Words in Modern Japanese: Through the Diachronic Investigation

Lin, Hui-jun*

Abstract

With the changes of era, languages also change little by little. This article mentions about the Japanese-made loan words, which has a remarkable change in modern Japanese vocabulary.

In this article, “ENCYCLOPEDIA OF CONTEMPORARY WORDS”, which is republished per year and can catch the change of vocabulary longitudinally was used as a investigation data, and the Japanese-made loan words was discussed in a diachronic way with the view of word formation.

Firstly, we can see the word formation of loan words by their change of quantity and find out that the word form of loan words prefers to be shorter in the recent decade.

Secondly, from the view of word formation, basically, the loan words which follow the existed Japanese word formation are majority, and the compound word formation is superiority in every era.

Furthermore, the characteristic of the loan words’ original morpheme appeared in the word formation of Japanese-made loan words in the recent 30 years. That is to say, the word formation of Japanese-made loan words has exceeded the range of Japanese

* Chair Professor of the Department of Applied Japanese, Kainan University

morpheme, and the Japanese-made loan words which were formed by the operation of their original morphemes were also observed.

Keywords: the change of loan words, word formation, diachronic,
Japanese-made loan words

現代日本語における和製外来語の造語実態
—通時的な考察を通して—

林慧君*

要旨

時代の変化とともにことばも少しずつ変わっていく。ことばの移り変わりは、音韻や文法、そして語彙などのさまざまな側面に見られるが、本稿は、その中で現代日本語の語彙、特に著しい変化様相を見せている外来語について検討するものである。本稿では、定期的に毎年発行され、言葉の様相の変化を縦断的に把握できる『現代用語の基礎知識』を調査資料にし、10年ごとの和製外来語の造語実態に関して、通時的な考察を行った。

まず、数量的な変化から語構造別に見れば、ここ10年においては、和製外来語の語形として短い方が好まれるようになったといった傾向が捉えられた。

次に、造語法から見ると、基本的には外来語も日本語の従来の造語法による例が多く、合成という造語法がどの年代でも一番優勢であることも確認できた。なお、ここ30年間、特に80年代後半から和製外来語の造語法に外国語原語形態素の介在による造語現象が目立つことが特徴として挙げられた。言わば、日本語の和製外来語において、日本語の形態素からはみ出した、外国語原語の形態素レベルでの造語操作も見え始めたということであろう。

キーワード：外来語、和製語、造語、形態素、通時的

* 台湾大学日本語文学科副教授

現代日本語における和製外来語の造語実態
—通時的な考察を通して—

林慧君

一、はじめに

時代の変化とともにことばも少しずつ変わっていく。ことばの移り変わりは、音韻や文法、そして語彙などの側面に見られるが、本稿では、その中で現代日本語の語彙、特に著しい変化様相を見せている外来語について検討する。

外来語は、その増加量や増加スピードがかなり著しく、もはや日本語の周辺部の問題と無視することはできなくなっている。近年の外来語の消長、そして、それが日本語の語彙体系に与えた影響などを究明するためには、その通時的な調査や分析が求められると言える。

ここ30年間の外来語の姿を捉えるために、小論では、定期的に毎年発行され、言葉の様相の変化を縦断的に把握できる『現代用語の基礎知識』を調査資料にした。特に、10年ごとのことばの変化を捉えるため、その1979年版、1988年版、1999年版そして2009年版を調査資料と限定し、それぞれの巻末の「外来語年鑑」[1]から和製の外来語のみを考察の対象として取り上げる。そして、その四年分の和製外来語を、語の構造や造語法、形態素の性質などの観点から分析し、ここ30年間における外来語の造語実態を垣間見ようとする。

二、先行研究について

外来語に関する通時的な考察を行った先行研究はそれほど多くない。本研究と関わりがあると思われる主なものとして、野村（1984）

[1] 『現代用語の基礎知識』の最後尾に付録として付いているもので、1979 年版では「マスコミに出る外来語・略語・総解説」と、そして 2009 年版の場合、「カタカナ・外来語辞典 2009」となっている。

と山本（1995）と橋本（2010）、そして林（2011）が挙げられる。

野村（1984）は、調査資料が本研究と同じく『現代用語の基礎知識』であるが、その対象が1960年版及び1980年版であり、本発表で取り扱うものとは年代が若干異なる。また、野村（1984）はすべての語種とその造語との関係を論究したものであり、外来語だけに絞りその変化を分析、考察する本稿とは、論旨においても異なるものである。

山本（1995）は、新聞（東京朝日新聞縮刷版・昭和7年）及び辞書（『辞林44年版』『広辞林』『広辞林新訂版』）の中の外来語を取り上げ、明治・大正・昭和初期における外来語の意味構造を分析したものである。山本（1995）の扱った資料の外来語は本稿の資料より60～80年も前のものであるが、75～100年後の現在の外来語にいかなる異同があるか、改めて調べ直す必要があるように思われる。

橋本（2010）は、20世紀の社説と演説を用いた現代日本語における外来語の量的推移についての考察であるが、その中で、外来語の増加過程が、

「はじめはゆっくり、半ばは急激に、最終段階で再び緩やかに増加する」

というS字カーブを描く、と指摘している[2]。橋本（2010）は、外来語の増加過程を主に量的に捉えられたものであり、この「S字カーブ」という外来語の量的推移の観点も通時的な外来語の変化を理解するには大変参考になると思われるが、外来語の変化を語構成的に解明しようとする本稿とは視点的に異なるものである。

それから、林（2011）も現代日本語の外来語の通時的な実態調査を取り上げたものであるが、主に『現代用語の基礎知識』及び外来語辞典における外来語の収録状況の異同を比較することを通して、ここ30年間の外来語の消長実態や語彙の性質などの分析を行ったものである[3]。本稿は、林（2011）での、30年間の外来語の消長実

[2] 橋本（2010）第 11 章を参照。
[3] 林（2011）は、橋本（2010）と同じく、外来語を通時的に調査したものであ

態などに関する考察結果を踏まえた上に、語構成の観点から現代日本語の外来語の造語実態を捉えようとするものである。

三、考察の方法

まず、『現代用語の基礎知識』（以下、『現基知』と略す）の 1979 年版、1988 年版、1999 年版、2009 年版における、最後の付録「外来語年鑑」の中から和製外来語[4]をピックアップする。そして、収集した外来語について、今回扱った範囲内に限ってその初出した年により、四つの年代グループに分けておく[5]。次に、四つの年代分の外来語に関して、語の構造や造語法の観点から、それぞれ合成語[6]、略語そして単純語と大まかに三種類（他に特殊な造語法によりできた特殊な外来語もある）に分けて分析していく。

上述した方法に基づき、本稿では取りあえず、収集した語例の中の、語頭ア～トまでの和製外来語[7]を取り上げ、数量的な変化、そして語の構造や造語法という二つの側面から論述していく。

るが、調査年代期間や用いた調査資料、そして分析の観点などにおいては異なっている。

4 本稿は、和製外来語のみを考察の対象としたため、以下、本稿でいう「外来語」とは、特に断らない限り「和製外来語」をさす。

5 初出した年代を基準にして分けているため、一度は出て、その後の版には出ていなかったりしても、初出した年代のグループのものとして処理する。例えば、「カーライフ」は 1988 年版にしか出ていないが、「カフェテラス」は 1988 年版からその後の三つの年代の版にも全て出ている。本稿では両者をともに初出した 1988 年版のグループに入れて考察することになる。

6 本稿で複合語と派生語を厳密に分けないのは、「テレ」「テクノ」といった、本来外国原語の接辞といった要素を含む合成語も本稿の検討範対象に含まれているからである。四（二）1、で述べるが、「テレ」「テクノ」などは、外国原語では明らかな接辞として扱われるものであるが、日本語になってくると接辞とすべきかどうかが問題になってくる。ここではそういった形態素の本質を論じる用意はなく、取りあえずそれらも含めて一括して合成語として論じることにする。

7 本来語頭アから最後までの和製外来語を調査すべきだったが、語例数が膨大であり、時間的な制限もある故、取りあえず、今回語頭ア～トまでの和製外来語だけを扱うことにしたわけである。調査結果は差し障りないと思われる。

四、分析

（一）数量的な変化から

まず、数量的な変化という側面から見てみよう。今回は、アからトまでの音で始まる和製外来語を調べたが、全部で 669 例収集できた。それを調査年代別に示すと、次の表一のようにまとめられる。

表一　調査年代別による外来語の数

	1979年	1988年	1999年	2009年
総数: 669	307 (46%)	118 (18%)	149 (22%)	95 (14%)

表一[8]から、今回取り上げた外来語の全 669 例のうち、1979 年版に出現した例は 307 例（46%）もあるとわかった。即ち、今回集めた、『現基知』に掲載されている、ここ 30 年間の外来語は約半分近くが 1979 年前に既に出現していたということを意味する。その後の、1988 年版、1999 年版、2009 年版から拾った語数はそれぞれ 118 例（18%）、149 例（22%）、95 例（14%）とある。1988 年以後の三つの年代に初出した外来語数は互いに大差がなく、大体全体の 1.5 割～2 割前後ぐらいを占めているが、数量的な変化から見れば、1999 年は 1988 年より外来語が 4%増えたのに対し、2009 年は 1999 より逆に 8%も減っているのである。つまり、1999 年は 1988 年に比べると、初出した外来語は増えてきた様相が捉えられたわけであるが、一方、2009 年は 1999 年と比較すると、逆にその外来語の初出ぶりが鈍くなってきた、という外来語における数量的な変化の違いが見られた。つまり、1988 年から 2009 年までの『現基知』に新たに収録された外来語数には、10 年ごとに増えたり減ったりという起伏ある増減傾向が見られることを意味する。新造の外来語が増加一辺倒

[8] 三、で述べたように、本稿では今回扱った四つの年に初出した用例を、年代を基準に分けて分析を行った。1979 年分に関しては、それより前の年代分は用意できていないため、比較もできない。したがって、1979 年分の外来語は、1979 年に初出した例かどうかが判断できないため、1979 年以前に既に出現している、という意味合いになる。後の三つの年代に掲載されている数字は本稿の調査範囲内での初出した数を表している。

ではなく、振幅ある変化を見せていることを傾向として指摘できそうである[9]。

次に、語構造により分類した合成語と略語、そして単純語のそれぞれの数の内訳を初出調査年代別に表二に示しておこう。なお、この三種類以外に、他に特殊な造語法によりできた特殊な外来語もある。

表二　　語の種類による初出調査年代別の数

	1979年	1988年	1999年	2009年
合成語	211(69%)	65(55%)	90(60%)	52(55%)
略語	74(24%)	43(36%)	40(27%)	30(32%)
単純語	18(6%)	7(6%)	16(11%)	10(11%)
特殊	4(1%)	3(3%)	3(2%)	3(3%)
総数	307(100%)	118(100%)	149(100%)	95(100%)

語の種類別に見られる数量的な変化を見ると、まず、合成語の場合、1979 年に比べると 1988 年は少なくなるが、1999 年がかえって増えている。しかし、2009 年になると、また動きが逆転し、比率が少々減ってくる。略語の場合は、合成語とは反対に、1979 年より 1988 年が 12%増えたのに対し、1999 年は減少し、2009 年になると、またひっくり返って 1999 年より 5%増えている。要するに、大まかに言えば、ここ 30 年間においては、外来語の合成語と略語はちょうど相補分布的な数量の変化を示しているのである。

一方、単純語の場合は、1979 年と 1988 年とでは割合からしてさほど差がないものの、1999 年になると、1988 年より倍近く増加したことが見られる。その後の 2009 年は 1999 年とまたあまり差がなく、一定した割合を保っている。言ってみれば、90 年代後半あたりは単純語の外来語の増加期とでも考えられようか[10]。

---

[9] 10 年ごとではなく、一年ごとのより詳しい分析が必要かと思われるが、ここではその傾向性だけを言及するに止まる。

[10] 特殊な造語法による外来語は四つの年代とも 1～3%とかなり低い割合を示している故、ここでは論外にする。語例については、四（二）4、を参照されたい。

（二）造語法から

この節では、ここ 30 年間の外来語の実態について、語の構造により、合成語と略語、単純語、そして特殊な外来語とに分け、造語法の観点から論じてみよう。

1、合成語

造語法から分析すれば、どの年度においても合成語の外来語が半数以上を占めていることが今回の調査を通して明らかになった。和製外来語において「合成」というのが最もポピュラーな造語法であることがわかる。また、従来の日本語の合成語と同じく、例えば、

「アフター・フォロー」「オフィス・ラブ」「カロリーオフ」
「キスマーク」「コイン・スナック」「スピード・ダウン」
「チーク・ダンス」「チームカラー」「ダブル・スパイ」……

のような、二単位の合成が一番多い。

合成語の中に見られる特徴として、まず、元外国語原語の接辞的要素による造語が見られたことが挙げられる。これは、1979 年版と 1988 年版にはまだそれほど多く見られなかったが、1999 年版以降は大分語例が多く拾えられるようになった。要するに、90 年代後半頃から、元外国原語の接辞的要素による造語が盛んになってきたように見受けられた。その例として下に少し挙げられよう。

「エコ」による、「エコトピア」「エコドライブ」、
「オート」による、「オートドア」「オートローン」、
「チック」による、「マスメディアチック」「ポルノチック」、
「テレ」による、「テレスキャン」「テレオペ」「テレアポ」、
「テクノ」による、「テクノカット」「テクノサウンド」……

ここに提示した「オート」「テレ」「チック」などは、元外国原語では確かに接辞的要素ではあるものの、日本語に借用されると少々複雑になる。日本語の語構成レベルにおいて接辞的要素か語基的要素かの、どちらとして扱うべきかが微妙な問題になってくる。上記の例から考えるに、日本語の形態素として扱っていいと思われる。要するに、元外国原語の接辞的要素が日本語の形態素になり、日本

語の造語に大いに寄与していると見られよう。

次に、アルファベットによる造語が現れるのももうひとつの特徴として挙げることができる。これも、1979 年版及び 1988 年版にはあまり見られなかった造語現象であるが、1999 年版以降は少しずつ増えていくと見られた。その例として、

「オーバック」(O-back)、「エックスデー」(X day)、

「エルサロン」(L salon)、「オーバック」(O-back)、

「ジャルパック」(JAL Pak) 、「ダイアル Q²」

などが挙げられる。要するに、90 年代後半頃から、本来なら日本語の形態素としてはたらくことのなかったアルファベットも、形態素としてはたらく造語現象が見られ始めたと言えよう。

2、略語

略語は、合成語の略語と単純語の略語に分けて考える。表二の中の「略語」だけを抜き出し、更に合成語と単純語別にその語数と比率を次の表三に示す。

表三　　調査年代別による略語の内訳

	1979年	1988年	1999年	2009年
合成語の略語	56(18%)	32(27%)	33(22%)	20(21%)
単純語の略語	18(6%)	11(9%)	7(5%)	10(11%)
略語総数	74(24%)	43(36%)	40(27%)	30(32%)

表三から見れば、合成語の略語に関して、全語数の中で占める比率は四つの年代のうち 1988 年が一番高い。その後、その語数の比率が少しずつ減ってくることが見られる。一方、単純語の略語は、全般的に合成語の略語より少ないものの、その語数の比率を見ると、合成語の略語の場合と同じく 1988 年が一番高い。但し、その後の 1999 年版では単純語の略語が減少して、2009 年版になると、またひっくり返って 6%も増えてくる。即ち、80 年代後半頃から 90 年代後半頃までは、略語は合成語にしても単純語にしても全体として減少してきた傾向が見られたが、一方、90 年代後半からここ 10 年まで

は、合成語の略語は少しずつ減るのに対し、単純語の略語は逆に増えてきた傾向が見られる、という両者の異なる様相が捉えられた。なお、後者の単純語の略語が 2009 年版になって 6%も増えたことは、90 年代後半から現在までに見られる、外来語略語の増加を如実に示しているように思われる。

略語法に関して、今回の調査に見られた合成語の略語の略し方を、林(2004)に基づき、略語の語形成過程の違いによって分類すると、次の四種にまとめられる。

a　省略語基の複合による略語

例、「カメラルポ」「テレビショッピング」

「アングラマネー」「インフレ・ヘッジ」[11]……

b　複合語の短縮[12]

① 複合語短縮：複合語の構成単位の一部が省略されるもの

例、「セクハラ」「アナドル」「イメキャラ」「セレギャル」

「アパマン」「エンスト」「オンレコ」……

② 複合語語省略:複合語の構成単位の一方の語が省略されるもの

例、「インターカレッジ」「ステアリング」「デシン」

c　b ①＋b ②

例、「カラコン」「センプレ」「サイドモール」……

今回の調査では上述した略語法において、b①[複合語短縮]を全部で 97 例収集した。これは全略語の約 7 割をも占めるもので、一番生産的な造語法であることがわかった。[複合語短縮]とは、外来語の複合語ができた後、その複合語の構成単位の一部が省略されるものをさす。例えば、「セクハラ」というのは、「セクシャル・ハラスメント」という複合語が先に作り上げられた後、前後の構成要素の一部(「セクシャル」の「シャル」、「ハラスメント」の「スメント」)

[11] 下線が引いてあるのは省略語基である。

[12] 略語法に関して林(2004)に基づくものであるが、当論文は外来語の複合語の略語を論じたのであり、本稿では略語法を論じるに当たり、それに従い、「複合語」の略語法と称して論述する。

の省略によってできた短縮形である。

そして、今回の調査では、複合語短縮の例として「アナドル」「イメキャラ」「セレギャル」「シネスコ」「オンレコ」「ジャパタイ」といった 4 音節語が最も多数拾われた。語形の省略については、外山滋比古氏によって「四拍ルール」という略語に関する観点が挙げられたが、外来語のみならず、若者たちの略語も「スケチェン」(「スケジュール・チェンジ」) や「アメブン」(「アメリカ文学」) などと多数挙げられる。四拍のことばは言いやすく、語形としても安定していると思われるのであろう[13]。今回の通時的な外来語の実態調査を通しても、この 4 音節語が典型的な略語の造語パターンであると再確認できたと言えよう。

b ①[複合語短縮]に次いで生産性をもつ造語法は a の[省略語基の複合による略語]であるが、これは、省略語基が他成分と複合してできた略語をさす。例えば、「カメラルポ」とは、「ルポルタージュ」から略した「ルポ」という省略語基が「カメラ」に結び付いた複合語の略語である。今回の調査では、このタイプの略語を 28 例拾えたが、全略語の中で約 1/5 を占めており、それなりの生産性をもっていると見ることができよう。ほかに、

「テレビショッピング」「アポとり」「ジグザグ・デモ」
「アングラマネー」「カメラルポ」「ゲバ子」「オートマ車」
「トイレジャック」「インフレ・ヘッジ」

なども見られる。

上述した二種の略語法に対し、b ②[複合語語省略]及び c の[b ①＋b ②]は生産性が低い造語法である。

まず、b ②[複合語語省略]であるが、例えば、「インターカレッジ」というのがある。これは、元々「インターカレッジ・ゲーム」というものであるが、後項要素としての「ゲーム」が丸ごと省略されたことによってできた略語である。今回の調査ではこのタイプの略語は全然生産的ではなく、僅か前に挙げた 3 例しか拾えなかった。し

[13] 外山氏の「四拍ルール」は野角（1998）の 109～111 頁を参照。

かも、この、b ②[複合語語省略]による三つの略語は古い年代（1979 年と 1988 年）の例であり、1999 年及び 2009 年にはこの略語法による造語は全然見当たらない。古くて廃れた略語法だと言えよう。

それから、b ①と b ②を合わせた、c[b ①＋b ②]という略語法に関して、「カラコン」を例に説明する。「カラコン」とは「カラー・コンタクトレンズ」という二次結合の複合語であるが、その前項要素の長音符、即ち構成要素の一部が省略されており、また、後項要素としての複合語「コンタクトレンズ」もその後項要素「レンズ」が丸ごと脱落した上に、前項要素「コンタクト」の後部分の「タクト」がさらに省略されたものである。即ち、この「カラコン」という略語は、複合語の構成単位の一方の語（「レンズ」）が脱落した上、複合語の構成単位の一部（「カラー」の長音符と「コンタクト」の「タクト」）も省略された、とやや複雑な略語法による造語である。ほかに「エレキ」「セラコン」「コンビニ」「テック」「コピペ」も同じような造語法による略語だと考えられる。今回の調査ではこのタイプの略語は全略語の中でただ 1 割近くしか見付からなかった。

最後に、複合語からの省略のみならず、単純語が更に短縮した略語もある。例えば、「コンパ」というのは、「コンパニー」という単純語から後部分（「ニー」）が略されたものであるが、今回の調査では単純語の略語は全部で 46 例拾えた。そのうち 42 例は、「コンパ」（←「コンパニー」）の如く、単語の後部が省略された語であり、その比率は 9 割以上も占めているが、単語の後部省略が単純語の略語の造語的な特徴として挙げられる。前部や中央部の省略よりも、単語の後部の省略が元の単純語原形を復元する効率性が高いからであろう。語形の長さとして、必ずしも 4 音節語とは限らず、3 音節語も少なくない。他に、「アジト」「インテリ」「シュール」「テロ」なども挙げられる。

単語の後部省略以外に、「インカレ」（←「インターカレッジ」）「トラポン」（←「トランスポンダー」） 「エンプラ」（←Enterprise）のような、単語の中央部とともに後部が略されたケースも見られた。

前述した単語の後部省略による略語と比べると、このやや複雑な略し方による単純語の略語は、単純語原形復元の効率性がやや落ちるためか、ほとんどが 4 音節語に略されている。それは語形としての安定さが求められた結果だと思われる。

3、単純語

下の表四からわかるが如く、和製の単純外来語は、前述した単純語の略語[14]も含めて、ここ 30 年間において比率が少しずつ増加してきた傾向が捉えられる[15]。

表四　　調査年代別による単純語の内訳

	1979年	1988年	1999年	2009年
単純語の略語（%）	18(6%)	11(9%)	7(5%)	10(11%)
単純語（%）	18(6%)	7(6%)	16(11%)	10(11%)
単純語＋単純語の略語	36(12%)	18(15%)	23(16%)	20(22%)

次に、造語法から検討しよう。

今回の調査で収集した単純語についてその造語法を分析すると、

d　単純語そのものの造語

e　「－る」の付加

f　外国原語の接辞による造語

g　混淆

と、四パターンにまとめられる。

四パターンの中で、d [単純語そのものの造語] が最も多い。例えば、

「ドドンパ」「インドロップ」「トマトベリー」

[14] 単純語の略語は、1979 年から 2009 年まで起伏する様相を示しているものの、1999 年から 2009 年までは 6%と大幅に増えていることからして、全体的には増加してきたと見ることができる。

[15] 四の（二）の 2.で、90 年代後半から現在に至って単純語の略語の著しい増加ぶりが外来語略語を増やした結果をもたらしたと説明した。それは、略語のみならず、この表四で示してあるように、90 年代後半から現在までの外来語の単純語の増加にも大きな影響を与えたことがうかがえる。

「スカイランド」「キャッチホン」「テクノスタシー」
「トラックマン」「カローリング」「エッチ」

などが挙げられる。これらの[単純語そのものの造語]の例の中では、例えば、「トマトベリー」(tomato＋berry)「スカイランド」(sky＋land)「キャッチホン」(catch＋phone)、「エッチ」(H←hentai 変態) などのような例が見られるが、これらは厳密的にその造語法を分析してみると、外国語の形態素の「複合」またはアルファベットによる造語などと考えられる。このことからすると、外国語の語構成レベルでは単純語と扱うことができないかもしれない。しかし、日本語の語構成レベルにおいてはこれらの語例は形態素分析に不適切、または不可能なため、単純語そのものの造語と扱ったほうが妥当だと思われる。

次に、e [「－る」の付加]という造語法について、今回の調査では「サドる」「ゼロる」「トラブる」といった、和語動詞の活用語尾「－る」を付ける動詞化の外来語を 11 例拾ったが、殆ど 1979 年以前にできた例である。言ってみれば、この和語動詞の語尾「－る」の付加による動詞化はやや古い造語法であり、80 年代後半からは生産性を持たなくなってきたのである。一方、「ドライブする」「ミックスする」「ダイエットする」といった例の如く、「する」の付加、即ちサ変動詞化が外来語の一般的な動詞化操作になったと見受けられた。

ほかに、f の[外国原語の接辞による造語]、「-er」「-ist」「-ing」などによる単純語の造語も挙げられるが、例えば、

「シャネラー」(Chaneler)、
「サイコメトラー」(psychometrer)、「ゲーマー」(gamer)、
「ジーニスト」(jeanist)、
「カローリング」(curolling)
「アッシー」(足＋-ie)

などの例である。これらの外国原語の接辞はまだ日本語の形態素としての資格は認められず、日本語の語構成レベルにおいては形態素

分析が不可能な故、単純語として扱うのが妥当だと思われる[16]。

それから、外国原語の綴りからの g [混淆]という造語法による例も見られる。例えば、「インフレッション」(inflation+recession)、「クロリティー」(quoit＋sporty)、「カリスマン」(charisma＋man) 、「テクノスタシー」(technostasy) などが挙げられる。これらの例は、外国原語レベルでの綴りからの混淆（混用）によるものだと考えられる。つまり、外国原語レベルでは意識的に「混淆語」だとされるであろうが、日本語の語構成レベルでは形態素分析が不可能なため、単純語扱いすべきだと思われる[17]。なお、これらは、前述した、「アナドル」(アナウンサー＋アイドル) などのような、日本語の形態素レベルでの構成要素どうしの複合から縮約した、b の① [複合語短縮]の造語法とは異なるものである。

上述した通り、e の日本語固有の「－る」語尾の造語法の衰退、そして、d、f、g の外国原語形態素の操作による造語の進出といったことからして、ここ 30 年間の日本語の単純語外来語の造語において、日本語本来の形態素からはみ出した外国原語の形態素は、まだ日本語の形態素としては認められないものの、日本語の語構成レベルにおいて少しずつ造語機能が働き始めるようになった、という現象が見受けられた。

4、特殊な外来語

以上述べた、種々な造語法による分類に入らない特殊な例も見られるが、僅か 13 例しかなく、全体の 2%に過ぎない。以下、その特殊な造語法を簡単に記述するに止まる。

まず、「もじり」という方法で作られた例、例えば、「トロレス」

---

[16] 「-er」などの外国原語の接辞による造語は、前述した「1. 合成語」に出ていた「マルチ」などの造語とは違う。ここに述べてある通り、「-er」などにより造り上げられた語、例えば「シャネラー」などは、日本語として形態素分析できず、単純語と扱われるのに対し、「マルチ」などの、元外国原語の接辞でありながら、日本語として既に形態素の資格をもつ故、「マルチタレント」などのように、複合語と扱われるべきである。

[17] f の[外国原語の接辞による造語]と外国原語の綴りからの g [混淆]という二つの造語法はそれほど生産的ではないとは言え、廃れた「－る」の付加法と違って生きた造語法と思われる。

は「プロレス」から、「チャムリエ」は「ソムリエ」から、「チキンシップ」は「スキンシップ」からのもじりだと考えられる。

他に、「逆ことば」という方法による例もある。例えば、「グラサン」とは「サングラス」を逆さことばにした俗語で、「ダンモ」も「モダン」の逆さことばである。

上述した「もじり」も「逆さことば」も、言わば、一種のことば遊びによる造語と言えよう。

なお、頭文字のアルファベットによる造語も見られる。例えば、「アイドマ」（AIDMA）、「ティーピーオー」（TPO）、「デューダ」（DODA）、「エステル」（S(tation)+(ho)tel）などがそれである。最近、この頭文字のアルファベットによる造語も含めて、アルファベットによる造語は日本語の造語レベルにおいて少しずつ増えていく傾向があるように見られる[18]。

五、おわりに

以上、『現代用語の基礎知識』を調査資料として、ここ 30 年間の和製外来語の実態に関して、語構成的な観点から通時的な分析を行ってきた。それをまとめると、以下のようになる。

まず、語構造別に数量的な変化を見れば、本稿の実証的な考察を通して、ここ 30 年間において、1988 年より 1999 年は合成語も単純語もともに増えたが、一方、90 年代後半からのここ 10 年では合成語は少し減少してきたのに対し、単純語は減らずに一定した比率を保っている。また、略語のほうは 1988 年より 1999 年が減少したものの、その後のここ 10 年は逆に増加してきた。この二つの数量的な変化を考え合わせると、ここ 10 年においては、和製外来語の語形として、短い方がだんだん好まれるようになりつつあるといった傾向が捉えられる。

造語法から見ると、当然のことながら、外来語造語においても、

[18] 申（2011）によると、ジャパニメーションのキャラクター名のネーミングにも、これらの特徴が見られるそうである。

基本的には日本語の固有な造語法による例が多いが、合成という造語法がどの年代においても一番優勢であり、半分以上も占めており、それらは主として構成要素二単位からの合成である。中に、「エコ」などのような元外国原語の接辞的要素が日本語の形態素になり、日本語の造語に大いに寄与すること、そして、アルファベットも日本語の形態素としてはたらくようになったことも、従来の日本語の形態素による造語をはみ出た特徴的な現象だと言えよう。

略語の場合は、[複合語短縮]（例、「テレフォン＋クラブ」→「テレクラ」）という略語法が一番多く用いられている造語法であるが、その中でも「スタメン」といった 4 音節語に略された語が典型的だということが、本稿の実証的な考察を通して証明できた。即ち、和製外来語の略語も固有日本語と同じく「四拍ルール」という安定した日本語の語形に収まりやすいわけであり、言わば、外来語の日本語化の証しとでも言えよう。

なお、今回の調査分析を通して、和製外来語においては、80 年代後半から、その造語法に「-er」「-ist」などのような外国語原語形態素の介在による造語現象が観察されたのが特徴の一つとして挙げられる。つまり、日本語の和製外来語において、日本語の形態素からはみ出した、外国語原語の形態素レベルでの造語操作も見え始めたということであるが、言わば、日本語は、外国語の借用が語彙レベルから形態素レベルまでに拡張したと見ることができよう。

一方、これらの外国語原語の形態素を日本語の形態素として取り扱っていいかどうかは微妙な問題であるが、日本語の造語に進出しつつあり、そしてその造語力が一向に衰えないのも否めない事実である。この外国語原語形態素の、日本語の語構成における位置づけや、日本語の語彙体系に如何なる影響をもたらすのか、といった問題については、今後の課題としたい。

参考文献

申　忠均（2011）「ポケモン・キャラクター名のネーミング―ネーミング方式を中心として」（『日本語文学』49）

野角幸子（1998）『日本社会にあふれるカタカナ語』（新風舎）

野村雅昭（1984）「語種と造語力」（『日本語学』3-9、明治書院）

橋本和佳（2010）『現代日本語における外来語の量的推移に関する研究』（ひつじ書房）

山本いずみ（1995）「訳語受容の変遷―新聞に使用された外来語―」（『名古屋工業大学紀要』47）

林　慧君（2004）「外来語の複合語における略語の語構成」（『語文研究』97 号）

林　慧君（2011）「現代日本語外来語の実態について―通時的な調査を通して―」（『高麗大学校・台湾大学共同研究発表会』、高麗大学校）

資料及び辞書

『現代用語の基礎知識』（1979 年版・1988 年版・1999 年版・2009 年版）自由国民社

『現代用語の基礎知識　カタカナ 外来語／略語辞典』（2009）[改訂増補新版] 自由国民社